

インターネット・マザー

Internet Mother

Rik@Kayama™

香山リカ



インターネット・マザー

一九九九年五月二〇日 第一刷発行

著者——香山リカ^{かやま}

発行者——細川泉

発行所——株式会社マガジンハウス

東京都中央区銀座三ー三ー一〇 千一〇四ー八〇〇三
電話 書籍販売部 〇三ー二五四五ー七ー七五
書籍編集部 〇三ー二五四五ー七ー〇三〇

印刷所——共同印刷

製本所——小泉製本

香山リカ(かやま・りか)

一九六〇年生まれ。精神科医。臨床経験を生かし、新聞や雑誌などで社会批評・文化批評を行なう。著書に、『リカちゃんサイコのお部屋』『自転車旅行主義』(以上、ちくま文庫)、『テレビゲームと癒し』(岩波書店)、『眠れぬ森の美女たち』(河出書房新社)、『心はどこへ行こうとしているか』(共著、マガジンハウス)などがある。

©1999 Rika Kayama, Printed in Japan

ISBN4-8387-1146-8 C0095

乱丁本・落丁本は小社書籍販売部宛にお送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

定価はカバーと帯に表示してあります。

▼マガジンハウスホームページ [http://www.magazine.co.jp/]



インターネット・マザー

Internet Mother

Riko @ Kayama

香山リカ

工業学院図書館
藏书章

ISBN4-8387-1146-8 C0095 ¥1500E

定価：本体1500円（税別）

マガジンハウス

1920095015002



インターネット・マザー Internet Mother

香山リカ

Rika © Kayama

Chapter 4

第4章 ボディ・アンド・ソウル・ナウ

未来の〈わたし〉がなつかしい 134

〈わたし〉は〈ウタン〉のパイロット 139

テレビゲーム・わたし・他者 159

Epilogue

終章 新リアル創世記

電子子宮の中の多胎児たち 182

あとがき 200

装幀 中島浩
装画 ラジカル鈴木

インターネット・マザー
Internet Mother
Rik@Kayama

香山リカ

Internet Mother
Chapter

1

第1章 ユー・ガット・”毒”メール

ドクター・キリコと毒ネット

●光の速さで泳ぐ夢

——じゃまた、電子の海でデートしましょう。

インターネットがいまだ一般には普及しておらず、パソコンでのメッセージのやり取りがパソコン通信と呼ばれていた頃、終わりのあいさつがわりによく、こんなフレーズが使われた。もちろん、実際には恋仲でもなんでもない相手が「またデートしよう」と言ってくるのだが、抵抗を感じることはなかった。それより、全身をねっとりした液体に包まれながらそこに浮遊している自分の姿をイメージさせる「電子の海」ということばの方に、どこか甘ったるさを持った解放感を覚えたりもしていた。

コンピュータ・ネットワークに身を浸すということは、映画『アルタドステーツ』のフロ

ーディング・カプセルに入ると同じように、意識を解放したり変容させたりするのだろうか？ SFの世界やニューエイジ系の書物の中では語り尽くされたテーマかもしれないが、その回答よりも先に私たちの現実の方がもっと遠くへ来てしまった。そんな気がした。

一九九五年、坂本龍一はアルバム『SMOOTHY』の中の「電腦戯話」という曲の中で、やはり電腦空間を「海」にたとえてこう歌ってみせた（作詞は高野寛）。

僕らは意識の旅に出る

あの海を渡り波に乗る

音もなく場所も時間もない

光の速さで泳ぐ夢

そう、この頃もネットワーク空間は「海」であり、そこにアクセスするということは「水につかる」あるいは「泳ぐ」ことであり、それはなんらかの「意識」の変化を伴うことである、ということ、私たちはかなりはつきり知っていたのである。もちろんそこには、先にあげたようなドラッグ文化や近未来SFの影響や、八〇年代後半から浅田彰が「この先、地球はグローバル・ネットワーク化されて、私たちはそこに漂う胎児となるであろう」とさかんに「預言」したことなども関係しているが、いずれにしても、「電腦空間」「海」「意識」はひとつのセッ

トとして捉えられていたはずだ。今でもネットワーク上でリンクされたいろいろなサイトを見てまわることを「ネットサーフィンする」と言うが、そのあたりに「電子の海」という発想の名残が見てとれる。

しかし、坂本が「光の速さで泳ぐ夢」と歌っていたのとほぼ時を同じくしてマイクロソフトの「Windows'95」が発売され、コンピュータは一気に学者や学生、マニアのための知的玩具からビジネスや生活の道具へと変化していった。パソコン通信からインターネットへと切り替える人も増え、もはやそこでのやり取りは「電子の海でのデート」などといったロマンチックな意味合いを持ったものではなくなっていた。

インターネットの普及により紙がいらなくなる。本が消える。在庫管理の必要なく商売ができる。直接、注文が受けられるのでコストがかからない……。もはや人々の関心は、そこで意識がどう変容するかといったことではなくて、物そのものやその流れ、あるいは価格がどう変わるかなどのきわめて現実的な方向へと向いていったのであった。

インターネットは怪物でもなければ救済者でもなく、現実の経済システムに組み込まれたひとつの装置なのだ。その登場により、ビジネスチャンスが広がったり仕事が変わる方向へと展開していくことはあるが、「未知の世界」などと必要以上に期待したり警戒したりする必要はない。これはあくまで現実のひとつのバリエーション、現実の延長なのだから、なにか問題が起きて、これまでの歴史の中で対処してきたのと同じように取り組みれば、解決はつくはず

だ……。

そんな空気で世の中がすっかり充填された一九九八年暮れ、しかし、ひとつの事件が起きた。

●ネット上の静かな「死」

インターネットを通じて青酸カリが売買され、少なくとも購入者の女性ふたりと売った側の男性ひとりが自殺していたことが明らかになったのだ。この事件は、売り主と見られる青年が自ら主宰していた掲示板で語っていた名をとって、「ドクター・キリコ事件」と呼ばれている。

この事件にこれほど人々が驚いたのは、「インターネットで毒物が簡単に手に入るという現状」にばかりではなかった。シンナーや覚醒剤などの売買は、暴走族や暴力団の古典的な資金集めの手段として、昔から知られていたはずだ。管理者のいないインターネットをブラック・マーケットと考え、非合法的な商売をやるうという人間が出てくることも、それを「現実の延長」と考えれば想像に難くない。それよりむしろ、徐々に明らかにされたインターネット上のやり取りの記録によると、ドクター・キリコの動機がどうやら単純な「金ほしさ」ではなかったらしい、ということの方に、人々は驚きと不可解さを覚えたのだと思う。

しかも、さらに言えば、売買されていたのは「死」であつたと言えるにもかかわらず、そこには「死」につきものの暴力性や破壊性すら、存在しないようであつた。「死」に関する会話が囁くように交わされ、「契約」が成立し、青酸カリを送られた人間のうちの一部がそれをひ

とりでそつと飲んでしまった。彼女たちの死そのものも、その直後には——ある情報によるとネット上ではちよつとしたニュースとなったようであるが——近親者を除けば社会全体に知られることもなく、実に静かなものであつた。そして、ふたりめの人の死が警察の目にとまつた直後、ドクター・キリコはすぐに自ら青酸カリをあと、この世から退場していった……。つまり、すべてのプロセスはだれの目にもつかないままにひっそりと進行し、世間が注目するようになったときにはもう、なにもかもが終わつていたのである。別に彼らは世の中に青酸カリをまき散らそうとしたわけでもなければ、「死」を布教しようと目論んだわけでもない。世界の片隅で声を低くして「自殺」や「クスリ」について語り合う人たちがいて、その中のある人がたまたまそれを実行に移してしまった、ただそれだけ。そんな感じさえあつた。

ドクター・キリコの掲示板である「ドクター・キリコの診察室」に残されたやり取りを見ても、そこに書き込まれたメッセージの奇妙なほどの冷静さや遠慮深さが印象的だ。この掲示板のテーマは「自殺するための薬物」ということであるから、参加している人はなんらかの形で「死にたい」「生きていたくない」と思つたことのある人がほとんどのはずだ。実際にドクター・キリコ（掲示板では「キリコ先生」と呼ばれている）に寄せられる質問の多くは、「こういう薬剤を手に入れたのですが、どれくらい飲めば死ねるでしょう」というようなものである。

しかし、良識ある人が見たら驚くような「死ぬクスリ」についてのやり取りであるにもかかわらず、彼らの口調はやさしく、穏やかなのだ。質問の冒頭には「お忙しいキリコ先生とは思

いますが」「偉大なるキリコ先生」といったあいさつを忘れず、さらに質問の途中には「いつもバカな質問ですみません」などと自己卑下的なことをばをはさみ、最後は「どうぞよろしくお願ひいたします」といった丁寧なお願ひのあいさつで終わる。自分の苦しさ、死にたいと思つた理由などをくどくどと書くような人は、ほとんどいない。あくまで相手（ドクター・キリコ）の立場に立った上で、必要なことのみを質問している。

また、それに対するドクター・キリコの返答も、同じような丁寧さと誠実さにあふれたものだ。薬学部出身という彼であるが、薬物に関する知識はほとんど、何年か前の版の「日本薬局方」というマニュアルに頼っているようである。回答のほとんどは、問い合わせのあつた薬物に関してこのマニュアルの該当ページから引用したデータをそのまま載せ、「動物実験での致死量はこうなっていますが、人間の場合は残念ながらわかりませんでした」といった彼自身の簡単なコメントをつける、という形になっている。それらを見るかぎり、質問者の「何錠飲めば死ぬますか?」といった問いへの有効な回答になっているものは、まったくといってよいほどない。また、「おそらく百錠でしょう」といったはつたりも見当らない。「薬局方ではこうですが、実際はわかりません」「忙しくて大学にも調べに行けません」と率直に自らの知識の限界を語っている。

しかし、「答えになってない」などと怒る質問者はおらず、回答に対してさらに「勉強になります」「お忙しい中、ありがとうございます」といった謝辞が寄せられることも多い。そ

のやり取りを見てみると、内容とはまったく場違いなことに、「さわやか」ということばさえ、ふと浮かんできてしまうほどだ。

おそらく質問者は、「お忙しいキリコ先生」が自分のために時間を割いて答えてくれた、ということじたいに満足するのだろう。また、「薬で（死ぬの）はむずかしそうですね」と自殺の中止（少なくとも延期）を匂わせる書き込みも少なくなかった。自分の抱える「生きにくさ」を否定せず、質問に対しても礼節正しく答えてもらったというだけで、逆に救われたような気持ちになり「死」以外の選択が見えてきたのかもしれない。

●「個」の融解と誕生

事件のあと、さまざまなメディアで報じられたドクター・キリコの素顔を見ると、彼は決して「お忙しい」わけでも「偉大なる」人物だったわけでもないようだ。大学を卒業していわゆるUターン就職したものの、長続きせずに退社。その後は塾の講師のアルバイトなどをしながら、親元で暮らしていたようだ。彼を知る人たちのコメントも、「成績は中の上でまじめ」「ちよっと変わっている」などよくあるようなものばかりであった。おそらく、実生活ではネット上で見られたような誠実さや率直さは発揮されておらず、あまり目立たぬ存在だったのではないだろうか。

「ドクター・キリコの掲示板」に集う人の方も同じで、彼らが日常の生活の中でも常に相手の

立場に立ち、礼儀正しく振る舞っていたかどうかは、疑問である。ドクター・キリコにしても参加者たちにしても、少なくとも現実では「さわやか」と言われるタイプではないこと、また万が一もしそう言われても嫌悪を感じるタイプであることは、たしかだと思う。

では、ネット上でのあのやさしさ、寛大さ、礼儀正しさはいったいどこから来るのであろう。彼らは、インターネット空間では明らかに現実とは「違っている」。何が違う？という問いに正しく答えるのはむずかしいが、人格あるいは自我のあり方がだ。そしてそれは、「ただそこで与えられた役割を演じている」というよりは深いレベルでの変化であるように、私には思える。

「個」の融解。「私」の消滅。電腦空間で起こりうる心の変化を、こう名づける人がいる。しかし、電源をオフにすると同時に消えるかりそめの姿であるかもしれないが、ドクター・キリコはあの空間の中で、自己主張や自己顕示とは無関係の確固たる「個」として息づいていた。その「個」はいつたい、どこから生まれてきたのか。それこそが人類に「幼年期の終わり」(A・C・クラーク)を告げる、新しい「個」の姿だと言うのであろうか。

電子の海。二十一世紀を迎えようとする私たちにとって、そのことばはもはや、電子ロマン主義華やかなりし過去の遺物のようになってしまった。

しかし、本当にそうなのだろうか？

私たちは今でも、インターネット空間にアクセスするたび、液体の中に全身を浸して浮遊す